

広報

# お米す

2026

2

No.253



(特集) 実は大洲にあった！喜多川歌麿の“本物”的版木

# (特集) 実は大洲にあった！喜多川歌麿の“本物”的版木



## 大洲市に残る、歌麿の貴重な版木

昨年放送されたNHK大河ドラマ「べらぼう～薦重栄華乃夢嘶～」で話題の喜多川歌麿。その歌麿の“本物の版木”が、大洲市にあることを知っていますか？歌麿の版木は、世界でもわずか4枚しか見つかっていません。そのうち2枚が大洲市で発見され、現在も文化財として大切に守られています。

## 喜多川歌麿とは？－美人画で世界を魅了した浮世絵師－

喜多川歌麿(1753?～1806)は、江戸時代後期を代表する浮世絵師です。版元・薦重栄華乃夢嘶～  
女性の顔や上半身を大きく描く「大首絵」という革新的な表現を生み出しました。町娘や遊女など、当時を生きる江戸の女性たちの内面まで感じさせる纖細な描写は、江戸の人々を魅了し、一大ブームを巻き起こしました。

黄表紙<sup>きひょうし</sup>の挿絵から錦絵まで幅広く手がけ、寛政の改革による表現規制のなかでも新しい表現を追求し続けましたが、文化元年に風紀取締りの処分を受け、2年後に没しました。葛飾北斎・歌川広重・東洲斎写楽と並ぶ浮世絵黄金期の名匠とされています。

※しゃれや風刺を効かせた、挿絵入りの物語書籍のこと。  
表紙が黄色だったことから、この名で呼ばれていた。



浮世絵木版画「狐釣之図」(きつねつりのす)

発見された版木は、「狐釣之図」(きつねつりのす)と呼ばれる9人の女性がお座敷遊びを楽しむ様子を描いたもので、制作年代は寛政8～9年（1796～1797年）ごろと考えられています。この作品は3枚続きの版木で構成されていて、肱川町で発見されたのは左右両端の図柄の版木です。



「当時三美人」

当時人気を集めていた「難波屋おきた」「高島おひさ」「富本豊雛（とみもととよひな）」という、実在した3人の女性を描いた歌麿の代表作です。この3人は、寛政年間に特に評判の高かった女性として、「寛政の三美人」と呼ばれています。

右下：水茶屋の「難波屋おきた」

左下：煎餅屋の娘「高島おひさ」

中央：芸者「富本豊雛」

写真中央は、「当時三美人」(とうじさんびじん)

## 肱川で見つかった、奇跡の版木

世界的にも貴重な文化財が、今もこのまちで大切に受け継がれています。思いを巡らせると、この2枚の版木が、制作された江戸を離れ、どのような経緯で肱川町へたどり着いたのか——その道のりには、今なお多くの謎が残されています。

浮世絵木版画「狐釣之図」は、本来3枚続きで構成された作品ですが、肱川町で発見されたのは左右の2枚のみです。世界に現存する歌磨の版木は、大洲市に残されている2枚を含めて、わずか4枚と言われています。

一方、中央部分の版木はいまだ見つかっていません。江戸時代の版木は、用途を変えて再利用されることも多く、姿を変えて今もどこかに眠っている可能性もあります。そう考えると、思いを巡らせずにいられず、歴史の口マンを感じさせてくれます。



左の版木（個人所有）



右の版木（大洲市所蔵）

### 版木発見から「狐釣之図」復刻版完成までの経緯

年月	おもな出来事
S51	肱川町立中野小学校の創立百年史を作成するために寄贈された資料911点の中に美人画の版木が1枚含まれていた
H10.8	千葉県美術館の浅野秀剛氏（学芸係長） <sup>しゅうごう</sup> が鑑定調査し、喜多川歌磨筆「狐釣之図」三枚続き錦絵の右版木と判明 ※現在は、大和文華館とあべのハルカス美術館の館長
H10.12	肱川町民からもう1枚版木があると申し出がある
H11.3	浅野氏に2枚目の版木の鑑定を依頼し、三枚続き錦絵の左版木と判明
H11.4	復元に向けて、中央の絵（版画）を所有するエルヴィエム美術館と交渉開始
H11.7	2枚の版木を肱川町指定有形文化財に指定
H11.10	「狐釣之図」復刻版完成

## 歌磨の版木、ここがすごい — 歌磨館職員が語る、世界に誇る文化財 —



肱川風の博物館・歌磨館  
河野 信介さん

歌磨館最大の見どころは、世界に4枚しか現存していない喜多川歌磨の版木のうち2枚を実際に鑑賞できる点です。浮世絵制作に使われた版木が現存する例は非常に珍しく、世界的にも極めて貴重な展示といえます。

浮世絵の制作は、出版社兼プロデューサーである「版元」が企画し、絵師・彫師・摺師の三者による分業体制で行われました。まず、版元の依頼を受けた絵師が下絵を描き、版元の承認後、幕府の検閲(改印の取得)を経て、許可が下りた下絵のみが出版されます。続いて彫師が下絵に従って版木を彫り進めます。版木には、髪の毛などの纖細な表現が可能で、数千回の摺りにも耐える、硬く粘り強い山桜の木が用いられました。彫りが終わると摺師のもとで絵師と摺師が立ち会って見本摺りが行われ、色抜けや彫り忘れないかを確認し、本摺りへと進みます。本摺りは200枚を「一杯」として数え、これを初版とします。初版が完売し人気が出ると後摺り・増し摺りが行われました。

やがて摩耗した版木は、表面を平らに削り直して再利用され、さらに裏面が使われることで次第に薄くなり、最終的には使用できなくなります。こうした理由から、版木はほとんど残ることがなく、現存する版木自体が貴重な資料になるというわけです。

数千人から万人いたとされる浮世絵師。その中でも特に名高い喜多川歌磨の版木は、約230年の時を経て、絵師・彫師・摺師の情熱を今に伝えています。

## 本物に出会える場所 肱川風の博物館・歌磨館

### 【風の博物館】

肱川町にあるミュージアム。「心に風を」をキャッチフレーズに始まった「肱川風おこし運動」の拠点で、風に関する図書などの展示や地域コミュニティづくりと都市住民との交流によって活力あるまちづくりを図るための施設。現在は、地元にゆかりのある美術作品をはじめ、さまざまなジャンルの展示を行っている。

### 【歌磨館】

歌磨館には、浮世絵が発展していく過程や歴史をパネルで紹介。また、歌磨をプロデュースした鳴屋重三郎の店『鳴屋耕書堂』を復元し、浮世絵の販売されていた様子を再現。「狐釣之図」の復元を例に浮世絵の制作の工程について紹介している。また、彫りや摺りに使用する道具も展示。

### 【基本情報】

大洲市肱川町予子林99番地1  
☎0893(34)2181  
《営業時間》 9:00~17:00  
《定休日》 火曜日、年末年始  
※火曜が祝日の場合、翌日休館



風の博物館  
ホームページ



歌磨作品の展示



『鳴屋耕書堂』を復元